



景気変動の本質についての研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤波, 信成 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000175

景気変動の本質についての研究

藤 波 信 成

北海道学藝大学岩見沢分校経済学研究室

Nobunari FUJINAMI : A Study on the Essence of Industrial Fluctuation

一、序 文

恐慌の研究は何時しか景気変動の研究に轉じ、今日多くの経済学者に興味を以て迎えられるに至つた。此景気変動の考察は学者によりそれぞれ異つた観点に立つものが多いが、一般に区別せられるものとして二種のものを挙げている。一は理論的研究であり他は統計的乃至記述的のものである。前者は景気変動の中に包容されている恐慌の成立条件、原因、成立機構を理論的に解明するものではあるが、それのみで満足するものではなく、景気変動の事実、これにより行われる経済組織或は制約せられる他の同時的現象の一般的知識を前提とし、統計的資料に依存する事はある。だが学説そのものは理論的であり説明的である。詳言するならば景気変動が如何なる形態をとりつゝ経過するか、経済を構成する各部分の事実、即ち物價、利子、生産物数量等の経済的数量が此変動につれて如何に変化して行くか、又それぞれの変動の遅速の関係、それぞれの変動の強度の間に如何なる関連があるかと云う斯様な事実、又は景気の徴候を見きわめ之を記述する事がその目的ではない。若しこれらの事実が興えられるにしても如何なる原因によつて景気の変動が起り得るか、又斯様な徴候が如何なる事情によつて存するかを明かにするものである。後者は景気変動に於ける諸般の事実を明確にし、それらの間の種々なる連絡(例えば出現の前後乃至共存に於ける、又は各々の間の強度の上の相関々係の如きもの)を明かにし、時にはかかる事象が必然的に成立しなければならぬ事由を明確にする。然しその目的は理論的の説明でなく事実そのものゝ精細なる認識、或は又その間の複雑なる連絡の確認これが到達せんとするものである。

此二種の考察は前述せる如く、相容れざるものではない。統計的考察と雖も、事実の記述と統計的整理を目的とするものでなく、完成された景気理論の確立にあるか

らである。今若し景気の変動に充分なる説明を興えるならば、景気変動の事実を正確に捉えなければならぬ。不確実なる事実的知識の上に立てられた理論は効果なく、事実の整理に没頭する所以もここにある。又理論的考察と雖も、一方には事実的知識それ自体の價値を認めない事はなく、他方自己の景気理論の構成の爲には出来るだけ精緻、出来るだけ広汎なる事実的知識を用意する事に於て益々其考察内容を確實豊富にする事を了解するだろう。今景気理論の展開に當り、あくまでもその主眼は景気変動の成立し得る条件、或は又これを必然ならしめるところの原因、更にこれを助長し、これを妨げるところの事情、又恐慌との關係にあり端的に言うならば、何故に景気が上昇し、それが如何にして下降するかにあるのであるが経済的事実のすべてに於て景気原因(靜態的、動態的)の諸因子につき言及する。

二、初期の景気變動理論

1815年を初めとする恐慌は1825年、1836年—1839年、1847年等と相ついで起り経済学者をして恐慌發生の週期性に目を轉じさせるに至つた。この恐慌の週期性の確認は、回帰的な各恐慌間に於ける経済界の経過或は更に初期の恐慌が如何にして發生するかと言う様に、経済学者の研究の對象は、明かに單に恐慌の事実のみにとらわれず、その観点はすゝんで経済界全般に亘つて行われ今日景気変動、景気の波動或はリズム、景気循環等の名称を以て呼ばれるに至つたのである。

斯様な経済界の推移についての事実的考察をなしたものは多いが、とりわけ英國の JOHN WADE であるといわれ *History of the middle and Working Classes*, 1834, p. 211. の中に『商業の循環は普通には五年或は七年まで完成し、而して過去七十年間の我が商業史に徴するに、その期間内に好況期とが交互に経験された事が明かにせられるであろう』と述べている。¹⁾ 又循環的変動の

思想は LORD OVERSTONE, HYDE CLARK, WILLIAM, LANGTON, JOHN MILLS, CONDY RAGUET, 及び AMOSA WALKER 等に依つて恐慌の週期性の論ぜられた場合に確認されたものである。

オーヴァーストン卿は一八三七年の著書に於いて景気の状態 State of trade が『定期的に復帰する。種々な状態に遭遇する事を我々は認める。第一に我々はそれを静止状態に——次には改善——信任の生成——繁榮——昇進——過度の取引——攪乱——逼迫——沈滞——困窮——更に静止に終る』¹⁾と云い、又ラングトンは Transactions of the manchester Statistical Society, Dec 1857. に『之等の攪乱は十年の期間を有する観ある他の波動の随伴物である。而して……之等の震動的運動を促進する原因は信用の濫用に存するが如し。』と述べ居り同様にジョン・ミルスは、Pathology (恐慌の病理) を論じて『年の経過と共に取引量を増減する不可思議な力』を仄めかした後に『殆んど各十年毎に貸付市場に莫大な、急激な、需要の増加を生じ、それに引続いては大攪乱と一時的な信用の破壊を伴うという事は疑う可らざる事実である。』『商業恐慌の周期性は兎に角、一の事実である。大なる商業恐慌の間に介在する十年間は一定の在続状態の下に於ける信用の発展の正常な循環である』²⁾としてミルスはその期間の商業信用を出生から死亡に至る人生の変化に譬えた。³⁾ ミルスは恐慌の主要原因を経済的施設の特性或は濫用によるよりは寧ろ事業上の判断を誤る感情的錯乱によるとの、心理的説明を與え、即ち好況は樂觀を生み樂觀は無謀を、無謀は不幸を生む、更に不況から財界が直立るのは、人々が恐れに程に事態が悪化しないのを知つて彼等の元氣回復する時だけであると稱したのである。⁴⁾ それ故商業恐慌の勃発に対する救済策としてミルスは、情報の普及という事を力説したと云われている。

- 1) 町田義一郎 恐慌学説史・景気変動論 p. 77 春秋社
- 2) Mitchell, W. C.—Business cycles, 1927, p. 11
- 3) Mills, J.—Transactions of the Manchester Statistical Society, Dec. 1867 に発表した Paper on "Credit Cycles and the Origin of Commercial Panics"
町田義一郎 前掲書 p. 78
- 4) Palgrave's Dictionary of political Economy, Vol. 1, p. 467
町田義一郎同上参照
- 5) Mitchell—op. cit., p. 9

このミルスと同様に景気変動論の先駆者として一般に知られている。クレマン・ジユグラは産業変動の週期性を確証した最初の学者であり「繁榮恐慌及び整理の三

期」の関係並に三者が互に同一順序で従う次第を示さんと試み英米佛の三ヶ國の実際について調査し物價、金利歩合、銀行の貸借対照表並に1696年以後の恐慌を以て之を補い、次の結論を得た即ち「何等の理論も仮定をも挿まざる單なる事実の観察は恐慌及びその週期性の法則を抜き出すに充分であつた。そこで活況繁榮物價騰貴の時期は常に恐慌を以て終り、次いで事業停滞、物價低落の数年間が来り大なり小なり商工業を圧迫する」¹⁾

それ故ジユグラは活躍期と抑止期との此規則的交替の原因に商品價格の週期的変動という原因のみを挙げ恐慌に先づ繁榮期には常に物價騰貴する事実を特徴と見做したのである。この騰貴は市場の自然状態となる。これについてツガン・バラノウスキーが述べ「此運動が停滞する時に恐慌は近寄るのである。——それが止む時に勃発する。一言にして云えば恐慌の主要原因或は唯一の原因とも云う可きは物價騰貴の停止である」²⁾と云い更に恐慌の發展過程を見るならば『商品價格の騰貴は自然に売行を停滞せしめる。故に物價が騰貴すればする程貿易貸借は一國にとつて益々不利となる。金は入超商品の支払として外國へ流出し始める。最初この金流出は微少であつて人々の注意を惹かないが、遂には商品價格は外國への売捌きが極めて困難になる程甚だしく騰貴する。物價は急激に下落し銀行や商會は破産し、人々は完全な産業恐慌の渦中に捲き込まれるのである。』³⁾と即ち『少くともジユグラは恐慌の週期性を主張したのであるが、一面に於ては彼自身の英米佛の恐慌史はその何れの國に於ても恐慌の間隔が規則正しくなかつた事を示している』⁴⁾とミツチエルは述べている。

- 1) Mitchell—op. cit., p. 452 ツガン・バラノウスキー—鍵本博訳 239頁
- 2) 鍵本博 同上 240頁
- 3) " " " 243頁
- 4) Mitchell—op. cit., p. 453

丁度ジユグラに相前後して英國の WILLIAM STANLEY JEVONS は Sun Spot Theory を公表し非經濟的原因即ち物理的原因を以て、景気変動を究明したのであるが、これについては後述するが、十九世紀の末葉、景気変動理論の研究に非常に大なる影響を與えた、ツガン・バラノウスキーについてその見解を見なければならぬ。一九〇一年に発表した彼の論文「英國に於ける商業恐慌の理論と歴史の研究」によれば『マルキシズム恐慌理論』の中で資本主義的再生産行程に関するマルクスの表式の修正に関連して述べ、彼はマルクス表式を修正して資本主義的生産組織の下に於ても無限の蓄積の可能を立証せんとしたのである。この結果彼はマルキストの猛烈なる批判

的となつたのである。それが爲彼は資本主義的蓄積の可能性は社会の消費力の増進とは無関係であると唱えた。即ち生産の拡張それ自身がその生産物の最もよき販路であると見做し、斯様な生産の拡張に應じて販路もまた拡張されるという。それ故社会的生産はその分割が比例を保つ限り販路には制限なく、従つて資本蓄積にもこれを妨げるものはないと主張するのである。又ツガン・パラノウスキーは一方に於て恐慌の週期性を認めるのである。ではその原因は何処にあるかと云うに彼は各種の生産部門が同程度に発達せずして、その部門間に均衡の破壊をもたらす恐慌となると主張するのである。以上景気変動に関する初期の理論の中心について述べて來たが、景気変動それ自身の本質について述べなければならぬ。

三、景気變動の本質（其の一）

景気、景気変動、及び景気循環がどの様な意味に解せられているか、先ず多くの学者の見解に従わねばならぬ。

ミツチエルは『景気循環 *Business cycle* とは組織的の社会的経済的活動に於ける変動の一種である *Business* なる形容詞は商業上の基礎の上に組織的に作られた諸活動に於ける変動に限り、又循環 *cycle* なる語は或程度の規則正しさを以て再帰せざる変動を斥けるのである。』と説明し更に景気変動の概念と區別する爲次の四現象を挙げてゐる。

- 一、恐慌と恐慌との間に起る 経済状態 *Business Condition* の変化。
- 二、財界 *Business Society* に於ける諸経済的活動の一小部分に影響する変動。
- 三、年々再帰する変動。
- 四、未だ充分確立せられざる第二次的趨勢並に「長期波動」。

一は活動性の上昇及び下降又はその反対の時には二回又は三回行ふ事がある点で異なり、二は景気循環過程包括的でない点で異なり、三は景気循環が年々きまつて回帰するものでない点で異なり、四は景気循環より長期間な点で異なりと述べる。それ故景気変動の一般的な又特徴的な性質は何んであるかと云うと、ミツチエルは「景気循環は発達せる企業組織 *Business Organisation* を有する社会の経済的過程の大部分に影響する活動性の上昇と下降の回帰ではほ等しい幅員の波動に分割し得ないものである。そしてその期間はその社会の経済的程度に應じて平均約三年から約六年に及ぶものである。』²⁾と云い又『景気循環は *Business Economy* 或は独逸の用語を用う

れば「高度資本主義」の形体に組織された経済的活動の特徴をなす変動の一タイプである。その循環は波状型を有し——各循環は回復拡張、衰退及び収縮の一樣相を包含する。之等の相次いで活動の変化は一國の経済的過程の全部には稀であるが大部分へ多少共速かに普及するのである。循環は再帰するが、然し定期的ではない。その平均年限は経済的発達程度の相違する社会に依つて異なるが約三年から六、七年である。此特色の表は拇紋 *thumb print* を作成し、その拇紋は経済的活動が蒙る変化の動搖の間にあつて景気循環を識別するのに必要である』³⁾と、更にその拇紋を作成する爲にミツチエルは統計的方法を用い時系列 *time series* を次に挙げる四種に分類したのである。

第一、永久的趨勢 *Secular trends* 景気変動よりも長期な趨勢的運動であり、この趨勢的運動を表示する線の歪曲は種々複雑な原因から生ずる幾多の波状的変動を示すのである。

第二、季節的变化 *Seasonal Variations* 例えば冬季に於ける石炭消費量の増加、十二月の買物の増加等である。

第三、偶発的動搖 *Random Perturbations* 経済的過程に絶えず沢山の勢力によつて影響されているのであるが、それを別の項目に區別し得ないものがある。然しその影響が大でなく余り不平等でない場合には多くは相殺され統計的記録に残らないものである。

第四、循環 *Cycles* 以上挙げた各種の変動と錯綜してはいるがその中で多少共正規的にして季節変化より長く第二次的趨勢よりも短い時間的経過を有する波状運動があり、それが循環である。又それは系列の場合には著しく認められ又或る時には殆んど見られぬものもある。斯様な個別的時系系列に平均一年以上の期間を以て再起する凡べての変動があるが、これを「特殊循環 *specific Cycles* と呼び景気循環 *Business Cycles* と呼ばれる一般運動と確然と區別している。

ミツチエルはこれについて『循環的変動は直ぐに見分けられる時にも常に他の変化の覆面 *Veil* ——永久的、季節的、偶発的の互に異つた割合を混じて織出された織物——で覆われているのである。他の変化というこの覆面を除くことが循環的変動を一層明かに見る爲に必要である。』又『時系列に見出されるすべての特殊循環が系統的に景気循環と時の点に於て関係しているという訳ではないのである。そこで如何なる経済活動に於て、特殊循環が景気変動と一致するかという事を決定する事が一つの仕事となるのである。』と、この統計的分析による時系列は何れも景気変動学者にとつて、景気循環を理解

する上の材料にしか過ぎないものである。ミツチエルは又「景気循環を理解せんとするには各種の過程に特有な循環的変動の間に存する関係を理解する事が必要である」と「これ等の関係に関連して作用する仮定は如何なる循環的測定が有意義な指標 *Indexes* を求める爲に結合されねばならぬか、又如何にして各種の活動を表示する個々の系列或は指標が用いられねばならぬかを決定せねばならぬのである。』¹⁾ 斯様にミツチエルの景気循環を他の変動と区別している点を挙げ、彼の景気循環の四局面、拡張 *expansion* 衰退 *recession* 収縮 *Contraction* 回復 *reival*²⁾ について説明したのである。

- 1) Mitchell—Business cycles, 1927, p. 468.
- 2) 同上同書同項目同頁。
- 3) Mitchell—Business cycles.—Encyclopaedia of social sciences, Vol. III p. 92.
- 4) Encyclopaedia of social Sciences. Vol III Mitchell—op. cit., pp. 92—98 参照町田義一郎前掲書 pp. 84—86
- 5) Mitchell—op. cit., pp. 100—106.

今一つ嘗つて独逸の伯林景気変動研究所長であつた。ワーゲマン ERNST WAGEMAN 博士の経済的変動の分類について見なければならぬ。ワーゲマンは経済的変動を大きく二つに区別し、更に小さく各二つに分類している。

一、一回限りの変化 (構成上の変化)

- イ、非継続的变化 (発展の中絶、轉位、崩壊、分裂等を含む変化)
- ロ、継続的 (発展の継続、拡張、変化、後退を含む変化)

二、週期的変化

- イ、固定的リズム変動 (季節的変動)
- ロ、リズム上自由に起る変動 (景気変動——狹義に於ける)¹⁾

ワーゲマンは一回限りの変化と固定的リズム変動を排除して残つたものが景気変動であるとの消極的定義をなし、又積極的定義としては『我々は先ず國民的経済的組織に於ける貨幣と財貨の完全な流通を前提とせねばならぬ、景気変動は此均衡状態の攪乱である』そしてこれがひき起されるや『この攪乱は反対方面に相等しい振動を生ずる、換言すれば反動の法則に従つて進むものである』とし更に『景気変動は経済的反動現象の総体と定義してもよいであろう』²⁾ と述べている。ワーゲマンにあつては景気変動を「経済的反動現象の総体」として考えられるが、ミツチエルに於ては、景気概念を「発達せる *Business Organisation* を有する社会の経済的過程の大部分に影響する活動性 *Activity* の上昇と下降の回帰」

即ち景気循環として理解せねばならぬのである。これ等両者共に他の経済上の変動から厳格に区別せんとするのは、これによつて景気現象の本質を明確ならしめんとする努力の結果であり、彼等が斯くの如く景気そのものを循環或は変動に依つてのみ理解しようとするのは景気現象の本質上これを理解するに必要と見做すからである。こゝに於て町田義一郎氏は「之は却つて景気現象の本質の理解を困難ならしめている観がある」³⁾ と述べている。丁度これ等と対照的見方に WERNER SOMBART がある。SOMBART は『個別経済の運命——其運命は結局更に内部的及び外部的諸原因の共同作用を俟つて定まる——に影響する限りに於ての市場関係の全状態、即ち市場の状況』⁴⁾ であると説き、又 PAUL MOMBERT は『経済生活の非合理的要素として市場関係及び価格関係に対する作用を通じて個別経済の境遇に対し、或は有利に或は不利に影響する市場の状況である』⁵⁾ と説明する。

- 1) Wagemann—Konjunkturlehre. S. 44—45. (English Translation—Economic Rythm p. 51) 町田義一郎前掲書 p. 86.
- 2) Wagemann—op. cit., S. 60—61. (pp. 67—68). 同書同上 p. 87.
- 3) 町田義一郎 恐慌学説史と景気変動論 87頁
- 4) 5) 丸谷喜市博士 景気現象の本質 國民経済雑誌 昭和5年 5. 6月号参照。

いま少しジョセフ・A・シュンペーター及びニコライ・デー・コンドラチエフについて述べよう。シュンペーターの景気変動の分析に於て五つの命題と定義について説明している。それは循環、趨勢、均衡、成長、革新についてであり、第一の循環については統計学的に二つの意味について述べる。『第一は歴史的期間 (理論的時間と区別される) に於ける一連の経済諸量の價値が單調な増加或は減少を現さず、それらの諸價値自身か或はそれらの時間に関する第一次或は第二次微分かの何れかが (不規則な) 循環を示すものである。第二にはこれらの変動はその様な各々の時系列に單獨に起るものではなく、連続的にしろ、若干の遅れをもつにしろ常に相互に関連性をもっている』と見て居り、趨勢とはその様な時系列——すべてではないが多くのもの——に於て我々の考察対象となる全期間をいくつかの小期間に分割し、それら小期間に対する時間積分の平均値が時間の経過に伴つて單調な増加或は減少を示すか、又は唯一回の循環を現すようになし得る事実を意味する』更に彼は1872年の各國の経済の好景気と一年後の経済情勢との差異についてその不均衡について同様である事実を認め、又1897年に於ける諸事件の経緯を分析する事により比較的均衡のとれた情勢と呼び、その結果を総括し得ると言及し、

この様に経済体系を比較的均衡のとれた状態と比較的不均衡な状態とに区別する常識的方法は景気現象の記述と測定とにとって極めて重要であると述べる。この様な観察に正確な概念を興える爲に次の様に定義している。『(マーシャル派の)特殊均衡 *Particular equilibrium* はある産業が全体としてその生産を増加或は減少させる傾向を示さないか、又はその所有する生産要素の結合を変更するが如き傾向を示さない時、その個々の産業内に内在する。総体的均衡 *Aggregative equilibrium* はドルの現在価値で表示された企業全体の受取総額が、同様にドル現在価値で表示され、又従業員にその労働を継続させるに十分なる利潤を含む原價総額に等しい場合にある。諸産業間又は諸産業内に於ける多くの不均衡に対し矛盾するものでない、この種の概念はケインズ氏の通貨流通過程の分析に於ける基本概念である。一般的均衡 *General equilibrium* は考察の対象となるすべての家計及びすべての企業がそれぞれ個々にレオン・ワルラスの云う意味の均衡状態にある場合である。我々にとって重要なのはこの最後の場合だけである。』と述べこれに統計的意義をもたせるために彼は時系列のグラフ上に幾つかの点を取り、それを結びつける事によつて表示せねばならないと云い彼はこれを正規点 *Normal Points* と呼ぶ、然し實際上斯様な状態が完全に現われ得ないため、彼はこれについて『他と較べてこの状態に一層近いとか一層遠いとかいう状態について闡説し得るに過ぎない。かくて我々は更に次の概念を定義する均衡隣接帯 *Neighborhood of equilibrium* は正規点が一定の恐らくは個別的な条件によつて逸らされるものを除いて、我々の時系列のグラフ上に現れている期間である。』と更に「成長」*Growth* については『単位時間当りの増加或は減少が著しい攪乱を伴わずに、経済的体系にあまねく吸収されるという意味に於いて、一般的に生ずる経済的資料の変動を意味する——この範疇に入る要因は、それを単に作用しているものゝみに限つたとしても、趨勢という概念にとり、また最小自乗法或はそれと同様な仮定に基く他の方法による趨勢の測定とつて、明かに経済的意義をもつものと思われる』と述べているが、彼にとつては成長についてはそれ程重要視して居らないそれは彼の次の言葉で充分受けとれる『我々は實際上この成長をも無視し、経済外的要因の場合と同様にその重要さについて何等考察を加えないことにする』と述べている。だがこの成長的要因と経済外的要因の力のすべてが景気変動を形成する諸力となり得ると云うのではない。それについて彼は『若し人類が自然の異変によつて彼等の経済生活を変えさせられるか、又は経済学の原則に反する行動 (*extra-economic*

action) によつて彼等自らそれを変化させる場合を除いて繁殖 (*Multiply*) と節約 (*Save*) 以外の何事も行われぬとしたならば、この地球上は明かに非常に異つた様相を呈したであろう。地球上がこの様な異つた様相を呈していないのは、それは全く生産及び取引方法に関する彼等の叡智——即ち生産技術の変化、新市場の獲得、新商品の導入、等々——によつて改善せんとする人類の不断の努力によるものであろう。我々はこの様な歴史的かつ逆行しえない生産手段に於ける変化を「革新」(*innouations*) と呼ぶ』と述ベシユンペーターは革新を次の様に定義している『革新とはいくつかの小階梯に分解し得ない生産機能の変動をいう』¹⁾ と、彼にあつてはこの革新が景気変動を惹起せしめる根本原因であると主張するのである。

- 1) Readings in Business cycle Theory
Selected by a committee of the American Economic Association under the chairmanship of Gottfried Haberler
Copyright, 1944, by the Blakiston Company.
J. A. Schumpeter. The Review of Economic Statistics, Vol. XVII, No. 4, May 1939, pp. 2-10. 後藤誉之助訳景気変動の理論(上) pp. 4-11.

コンドラチエフは資本主義経済の動きを特色づける統計的系列の研究により「長期波動」の仮説を立証し多くの命題を興えている、『(-)長期波動は事実同一の複雑な動的過程に属しているものでその過程の中で好景気や不景気の様相をもつ資本主義的経済の中間的循環が変動しているのである。然し乍らこれらの中間的循環は長期波動が存在すればこそ、一定の型を獲得するのである。我々の調査から証明された事は、長期波動の上昇中は繁栄の年が一層多くこれに反し、不景気の年は下降中に多いという事である。(+)長期波動の後退中は原則として農業が特に顕著な長期の不景気にあつたのである。これはナポレオン戦争後おこつたものであつたし、1870年代の始り以後再び生じ同様な事が第一次世界大戦後の数年間に見られるのである。(+)長期波動の後退中は生産とか交通の技術の特に多くの重要な発見や発明が行われるが、それは次の長期の上昇の初めにのみ大規模に使用されるのが通常である。(+)長期上昇の当初に於いて原則として金の生産が増大し、(財貨に対する)世界市場は一般に新しい國、特に植民地的諸國家を同化する事によつて拡大される。(+)長期波動の上昇の期間中、即ち経済的要因の拡張の高度の緊張の期間中にこそ、最も災害も多く広範囲の戦争や革命が勃発するのである。』¹⁾ とコンドラチエフはこの長期波動の立証に當つて引用した関係資料が約

140年に及んでいる事と、この期間は二箇半の循環のみを包含するにすぎない、という事に於いて長期波動の存在性を認める。然し彼はこれらの波動の周期的性質を完全なるものと断定し得ずと述べる、だが彼が引用された資料によつて周期的性質が極めて事実に近いものである事を認める。これに対して多くの反対がある。それは長期波動は景気循環が示す規律性を欠いているとなすものである。だが彼はこれについて『「規律性」をもつて規則正しく時をおいて繰返す事であると定義し、長期波動も中間波動と同様に以上の様な性質を有するものであり、社会的経済的現象に於いて厳密な週期性は長期波動に於いても中間波動に於いても、少しも存在しない。中間波動の長さは少くとも7年乃至11年の間を、即ち57%を浮動する長期波動の長さは48年から60年即ち25%の浮動する』²⁾と更に『若し規律性を種々の系列の変動の類似性と同時性であると解するならば規律性は中間波動にも長期波動にも同じ程度に現われる。若しも規律性を解して中間波動が國際的現象であるという事実にあるとするならば長期波動はこの点に於いても中間波動と異なることはない。結局長期波動にも中間波動にも同様の規律性があるし、若しも後者を周期的なものと指称しようと欲するならば前者に対し、この特性を否定しないようにしなければならぬ。』³⁾コンドラチエフは長期波動を以つて資本主義的制度内の諸原因から生ずる中間波動と區別し偶発的、超経済的事実及び出来事、例えば技術上の変化、戦争及び革命、新しい諸國家を世界市場に同化させる事、金生産の変動によつて條件づけられると(他の批評家により)指摘されているが、彼はこれについて『これらの省察は重要であるが、又正当ではない。その弱点は次の事実に存する即ち此等の省察は因果関係を轉倒し、結果を原因と見ているか或は事件を支配する法則を実際に取扱わねばならぬ場合に偶発事と考える事である』と説明する。彼に於いては長期波動が統計的資料により実証され、その存在性を認める時、これが経済的發展に重要な本質的な要因であり、その効果は社会的及び経済的生活のあらゆる面に見出される要因であると見做すのである。だが彼はその存在性を仮りに認めるにしても勿論経済的力学は一定の水準の上下を變動するに過ぎないと信ずる事は正当でないとし、経済的活動の過程は疑いもなく發展過程を表わすが、この發展は明かに中間波動のみならず、長期波動を通じて進行するというのである。長期波動の存在を認め、前述せる長期波動は偶発的原因からではなく長期波動は資本主義的経済の本質に、固有的なものである原因から生ずるものと見做すのである。

- 1) Readings in Business Cycle Theory 前掲書
N. D. Kondratieff The Review Economic statistics, Vol. XVII, No. 6, Nov 1935, pp. 106—115. 後藤善之助訳景気變動の理論(上) pp. 44—45. 実業之日本社
- 2) 前掲書 p. 46.
- 3) 同掲書 p. 47.

四、景気變動の本質(其の二)

景気變動に関する代表的な欧米学者の中心課題たる本質的理論の分析を試みたのであるがこれを以つて本質の総べてを包括したもとは思われない。こゝに於いて一層深くこの問題について述べなければならぬ。景気という概念が経済学上に用いられたのは1864年 FERDINAND LASSALLE 及び ALBERT EBERHARD, FRIEDRICH SCHAFFLE によつてからである。然し前述した如く一方では他の経済的變動から區別した特殊の變動を表わす意味に用いられたのである。ワーゲマンは景気学或は景気論 *Konjunkturlehre* と云う時、その特殊な變動だけではなく諸経済力の總べての相互作用を包括する広汎なる意味で用いられたのである。¹⁾ 斯様に今日では三種の意味即ち一私経済上好況の俗称、二好況不況を包含する全体の意味、三特殊の變動である。前述したゾンバルトの景気概念が市場の状態であるならばそれは需要供給の一般的社会適合関係を指すものと考える事が出来る。即ちこの需要供給の一般的適合関係が景気である。それ故生産者に好都合な需要供給の適合関係即ち市場の状況、つまり生産者がその生産する限りの生産品を彼等の期待する價格を以て供給し得るのである。即ちその價格で需要される場合が「好景気」である。然しこれについて多くの誤りがある様に思われる。それは純粹に消費者としての立場は問題とされて居らず、市場に於ける需要供給の適合には消費者と生産者とは対等の関係にあるからである。これについて町田義一郎教授によれば景気という問題にふれる時所謂好景気を純粹な消費者の立場から云う時は必ずしも良き市場の状態であるとは見做れず不利な状態であり、社会的意味に於ける景気が一方的関係から成る概念ではないとすれば、これは正常な景気とは言えないのであつて景気はその均衡を觀念上失つて居り、それは正常な景気の均衡の失われた状態であるというのである。だがそれについて更に資本主義的経済組織の下に於いては正常なる景気状態が一つの觀念としてのみ存在する事になり景気概念はこの均衡の失われた動的な状態に於いてのみ理解される²⁾と云うのである。この正常的という語句にも多くの学者の見解があり、代表的なものについて述べなければならぬ。経済的循環の如何なる

状態を以て正常的と見るかについて上昇下降の全循環段階がそれであると見る、シエビットホフ、ゾンバルトがある。だが経済学の傳統として正常的と云う事は普通の、ありふれたる、と云う事を意味するのではなく又一つの経過をも意味するものではない。それ故景気循環そのものを正常的と云うのは混乱を招く恐れがあるとレヴェエは言う、又高田保馬博士は景気変動の過程に於いて何が正常的であるかという問題に当つては靜的理論をとるものゝ間にあつても異見を抱くものがある。それらは景気の循環の全過程そのものを以て正常的なりと見るのである。資本主義経済に於いては景気の循環は必然的であり免れがたい事象なのである。つまり常態的の意味に於いて正常的である。斯様な立場をとるとしても、正常的と云う事が所謂自然的意味に、即ち競争の結果として落付いた均衡の姿としての意味に解せられるならば、その意味に於いて沈滞の姿を正常的というも何等反対すべき理由はない筈である³⁾という高田保馬博士はこれについて更に深く述べている、即ち沈滞の姿を以て靜態であると見做す靜的理論に関する二つの反対に言及している。其の一は沈滞の状態を以て靜態であるとみるのは當を得ないとなし二三の例を挙げている。均衡に於いては利子と資本利潤の間に開きがなく企業利潤は極度に小となる。又この姿に於いては労働者はすべて従業して居り、年々の生産額は消費額と相等しい、従つて商品の貯蔵が増減する事がないのである。然しこれらの事は一つも事実としてあらわれていない、沈滞の底即ち靜態化の極致に達した場合にあつても企業利潤は可なり大であり、失業者は最も多く消費額は生産額を越え商品の貯蔵数量は減少するのである。斯様な事情から見ても沈滞状態を靜態と見る事は誤謬であると云う。又其の二は靜態から景気の一般的上昇を導き出す事は極めて困難であるという問題である。これについては均衡に落ちつこうとする傾向が認められる以上、金融例えればある種の財に関する部分的変動から出発し如何に一般の景気上昇を導き出す事が出来るか、それらの事象が何等かの変動即ち攪乱を興えるとしても此攪乱は均衡の傾向によつて漸次自発的に除去される、斯様に考察するならば景気変動の靜的理論は成り立たないのである。⁴⁾ 高田博士は第一の反対論に賛成し第二の問題については強く否定している。こゝに於てミツチエル其他の景気学者が景気概念を常に景気変動或は循環としての変動に重要性を置いて居る事の意義が明瞭になるのである。資本主義社会にあつて正常な景気の均衡の失われた状態即ち景気変動の原因は何であるか、それは資本主義組織に内在しているもの即ちその中に内生する矛盾である、斯様に考えるならば景気運動は

全く資本主義と共に歩むものとみられ、資本主義の窮極的な帰趨的運動を全体としてでなく其の部分的作用の現出として把握したものである。それが爲資本主義経済の発展にはその内に矛盾があり、その矛盾が資本主義社会に於ける趨勢的運動をして永遠のものたらしめず結局資本主義的経済生活に行きつまりを來すのである。それ故景気運動はその過程に於て生ずる派生的或は附隨的運動である。端的に云うならば景気運動は資本主義制度固有の恐慌促進運動でなければならぬ。この運動が他の諸外生変動原因と合致作用し或る時は此運動を活発化し又或る時は之を緩和し抑制してこゝに或る時に於ける景気現象を生ずるのである。然しこれが内生外生両変動の不断的作用とその消長によつて絶えず変動するのである。以上が固有の景気運動即ち資本主義的景気運動の本質である。然しこの景気運動の原因たる資本主義制度の矛盾は前述の如くその中に趨勢的運動の行つまりの原因をも含んでおり、趨勢的運動とこの景気運動とはその矛盾から生ずる二つの表現即ち一実体の二運動に外ならない。その同一原因が前述の如く外生的原因の発生と相俟つて或はこれを刺激し或はこれを抑制し相共に現実の景気現象即ち市場の状況の変動となつて現われる時、これが景気変動である。斯様に見るならば景気運動は循環運動ではなく、景気運動が循環運動であるならば、この運動と趨勢的運動とを一原因の二運動とは言われぬ、それは趨勢的運動と共に前進運動であり発展運動である。だがそれは資本主義的現行制度の永久的発展或は前進を助長する前進運動でもない。この運動の発生原因が同制度の矛盾にあり、又矛盾の増大と共に発展する運動だからである。循環或は週期的運動でない景気運動はその発展の途上に於て外生的変動原因と共に、絶えず新しく現実の景気即ち市場の状態に現われて来る。斯様に現われた市場の変動、即ち景気の変動は週期的、回帰的であり又恐慌の週期性も認められる。趨勢的運動は潜在的な運動であり、両運動共に資本主義の矛盾から生じた盲目的必然的運動なのである。景気運動の作用はその出現と趨勢的運動の作用と共に益々資本主義の矛盾を深める、即ちこの両運動はその発展の過程に於てそれを生んだ矛盾を盲目的に深めて行く事によりその運動の発展があるのである。斯様にこの運動は資本主義がその矛盾に耐え得る事が出来ずして崩壊する迄その進行は止まないものである。かく考える時この運動の窮極の発展がなければ、資本主義が崩壊する事がないと考えるのは誤りである。然しこの制度の崩壊した時にはこの運動も靜止しそればかりでなく全く消滅してしまうのである。こゝに於いて正常な景気現象は考えられ、ただ残るものは外生原因(この原

因もその根本に於て多く景気運動と密接な関係があるため又その重要さを失う)による景気の変動のみとなり、人類の経済生活の永久的発展としての新しい趨勢的運動が始まるのである。

(註)

- 1) 内生外生両原因の區別はブウニアチアンに試みられて以来漸次数多の学者に採用され、ヘルクナアにあつても全然これと有機的無機的とが同義語として用いられている。
Wegemann——op. cit., S. 44. (p. 50).
- 2) 町田義一郎 前提書 pp. 89—90.
- 3) 高田保馬 景気変動理論 日本評論社 p. 306
- 4) 同上 p. 307

五、結 論

景気変動に関する分析をなし、更に多くの問題について述べたが、これを以つて完全とはいわれず、恐らく多くの疑問を残したかも知れぬ。こゝに於いて私はこの根本問題を重点的に抽出し、適確なる判断とその保持に努めなければならぬ。市場の状態である現実の景気が資本主義制度内に内生する経済原因、即ち固有な景気運動の原因により常に左右される。然しそればかりでなくそれ以外の他の原因即ち社会的、政治的、物理的及びその他の外生的経済原因がそれである。この外生的経済原因の一つである季節的変動原因以外は総べて偶発的原因であり、此等は資本主義制度に必ずしも附随するものではないが、これらの原因は彼等独自の作用により景気の変動が考えられるのである。我々が現実景気の変動として我々の目前に現われる時、それは内生的原因による、景気運動或は各種の外生的原因による、景気変動が個々別々に独立した一現象として現われるものではない、これらは相互に相殺し、混和し或時は合して一現象となるのである。斯様に多くの原因を内蔵する景気変動即ち、市場の状況も又複雑化するのである。こゝに於て多くの者がこの変動原因を精確に認識する事が出来ず、單に外生

的原因のみを以つてその変動原因であると見做す大なる誤謬に屢々陥るのである。前述した多くの変動原因の影響により変動する景気即ち景気変動が我々の経済生活の量的変動の全部又はその考慮する必要がある部分を含んでいるとすれば、此景気変動は経済生活の質的変動である社会的経済機構の変革と相俟つて経済変動の全部或はその重要な部分の總べてを含んでいるものと考えられる。だがこれらの社会的経済機構の変革即ち、一時的変革過渡的変革、永久的変革並に部分的変革と全体的変革にわけて考察する事が出来る。この変革については本問題外にあるので深く説明する事は他に譲る事にする。変革の完全なるものは永久的の全体的変革にある。前述した資本主義制度の矛盾に内生する趨勢的運動が、つまり永久的全体的機構の変革に向つている事は当然の事である。この運動は資本主義制度内に存在する矛盾を原因としているものであり、矛盾はそれを包含する制度とは相容れない存在だからである。それ故この運動も資本主義と相容れないもの即ち資本主義と異つた経済機構に向つていふと考えられる。然しこの社会的経済機構の変革はあえて景気運動と相俟つた趨勢的運動の窮極的達成をまつてはじめて到達するものとは限らないのである。景気変動の原因である社会的政治的原因及びその他の偶発的変動によつてもこの変革はなされるものであるが、非経済的変動原因の中で社会的政治的原因は單なる偶発的原因ではないのであるが、その根本は常に経済的原因特に内生的原因と密接な関係にあると考えられる。斯様な関係ある原因に於いてこそ社会経済変革と関係を生ずるのであると言える。この点に於いて物理的、季節的変動は重要性がなく單に附随的原因と見るのである。こゝに於いて多くの景気論と異にする点は内生的変動即ち景気運動と趨勢的運動は19世紀以來の高度資本主義の発展と共に、その制度の矛盾に伴つてその制度に内生する固有な必然的前進運動であり、その運動自体は回帰的でないと見るのである。